

第2部 基本構想

第1章 まちづくりの基本方針

第1節 まちづくりの基本理念

前回の第2次総合計画では「豊かな自然と歴史がいきづく田園文化都市」をまちづくりの目標に掲げ、施策を推進してきました。今後もこれまでの施策を継承しながら、豊かな自然を活かし、さらなるまちの発展と魅力を高めていくまちづくりが必要となります。

本町は豊かな自然環境、歴史・文化に恵まれたまちです。今後のまちの発展に向けて、この自然環境や歴史・文化を今後も守り育てるとともに、少子・高齢化社会に対応した諸施策をはじめ、本町のこれまでの都市整備をふまえ「田原本らしい」まちづくりを行います。

また、今後は住民の積極的なまちづくりへの参加・参画を促進するとともに、その機会・条件整備に努めます。さらに、田原本駅前周辺整備、京奈和自動車道の開通による広域交通網の発展により、内外に本町の魅力を発信し、人・もの・情報がまちの中を行き交う活力あるまちづくりをめざします。

本町にいつまでも住み続けたい、住んでみたいと思えるよう、豊かな自然環境の恵みと広域交通網の整備による充実した都市機能を活かしたまちづくりを進め、田原本独自の文化を育んでいきます。

第2節 まちの将来像

本町の特性やまちづくりの基本理念をふまえ、まちの将来像を次のとおり定めます。

自然と歴史・文化が育む新しい生活拠点 たわらもと

本町には豊かな自然がつくり出すゆとりのある空間や古から引き継がれる歴史があり、これらの生活基盤のもとで、地域資源を活かした産業が展開されています。

今後、この環境下に田原本駅前周辺整備、広域交通網の整備が進められ、さらに充実した都市機能が加わります。これからもさらにまちへの愛着が湧き、誇りを持ち続けてもらい、あらゆる人がいつまでも住み続けたい、住んでみたいと思えるようなまちづくりをめざして将来像を設定しました。

第3節 まちの将来フレーム

1. 人口フレーム

「第2次総合計画」では、本町の総人口が昭和60年に3万人を突破し、その後も増加傾向が続いていることから、人口増加のエネルギー、土地利用の動向、将来都市像をふまえて、平成17年初頭で40,000人と想定していました。

しかし、全国的に人口が減少傾向にある中、本町においては平成17年10月1日の住民基本台帳では、人口が33,424人となっています。

本計画においても、豊かな自然と都市機能が共生することで、あらゆる人がいつまでも住み続けたい、住んでみたいと思えるようなまちづくりをめざします。そして、人口が減少する社会において、京奈和自動車道田原本インターチェンジの設置等により、人々の定住と流入を促進することで、目標年次である平成28年度において、人口35,000人となるまちをめざします。

2. 土地利用フレーム

土地は限られた資源であり、生活及び生産に通ずる諸活動の共通の基盤となります。土地利用にあたっては、自然環境の保全に努めながら、地域の特性に合った土地利用を図ります。新しい都市機能拠点づくりなどの長期的な展望のもと、公害の防止、自然環境及び農地、歴史的風土の保全等に万全を期するとともに、計画的な土地利用の促進を図ります。

■地域構造フレームの設定

地域構造フレームの設定にあたっては、町域をその特性に応じて、都市計画マスタープランとの整合を図りつつ5つの拠点を設定し、自然環境と都市機能、歴史文化が調和したまちづくりを進めます。

(1) 都市中枢拠点

中心市街地の機能を高め、「都市中枢拠点」の充実を図るとともに、ここから周辺地域や都市にアクセスする放射状のネットワークを形成します。また、景観に配慮した文化の薫りたつまちづくりを進めつつ、市街地整備と商業機能、交流機能の充実に努めます。

(2) 新都市機能拠点

京奈和自動車道の整備によるインパクトを活かし、緑農環境を守りながら、「新都市機能拠点」として、町の中心部と連携し、新たな都市機能の形成を図ります。

(3) 歴史拠点

良好な自然を保全するとともに、まちのシンボルである「唐古・鍵史跡公園」を「歴史拠点」とし、住民が身近な自然と歴史・文化にふれることのできる良好な環境の整備を図ります。

(4) コミュニティ拠点

暮らしの利便性を高めつつ、健康づくりセンター、老人福祉センター、やすらぎ公園などの「コミュニティ拠点」を中心に、自然とのふれあいや親しみのある田園景観の保全を図り、うるおい豊かな環境の創出に努めます。

(5) 文化・スポーツ拠点

閑静な田園環境をはじめ、初瀬川河川ルート公園や「スポーツ拠点」として中央体育館・健民運動場などを活かし、さまざまな交流を育みます。また、青垣生涯学習センターを活用した「文化の拠点」として位置づけます。

■土地利用の概念図 (地域構造フレーム図)

